



## 第51回 災害から見えてくる「当たり前でないもの」

### ▼豪雨の被害

先日の豪雨で鳥取県内では1名、岡山58名、広島91名の死亡者がでた。亡くなられた方々には心より追悼の意を表したい。日野川の水位もかなり上昇し、勤務している日野病院のある日野町では一時、避難指示が出された。日野病院の官舎でくらす教室員に川の水位を確認するなど、不安な夜を過ごした。集中豪雨をきたす線状降水帯が山陰地方の真上にくる可能性も十分にあった。その場合、鳥取県の被害はこの程度ではすまなかつたろう。豪雨が過ぎてみれば、30度を超える猛暑である。被災された人たちは家や家族を失い、避難所で不便な生活を強いられていると思う。智頭線は土砂崩れで不通となり、米子から岡山へ向かう伯備線は復旧までに1ヶ月以上かかる様子である。高速道路は使えるが、JRが不通になると山陽側との心理的距離が遠くなった感じだ。災害は、日常を支えている「当たり前」が「当たり前でない」ことをあらためて教えてくれる。東日本大震災でも「まさかこんなところまで津波がくるなんて予想してなかった」という人は多い。しかし、吉村昭の「三陸海岸大津波」を読むと、三陸地域は30-40年おきに大きな津波におそわれていることがわかる。当時被災した人たちは、記録や碑文を残して子孫たちへ警告を発しているのだが、世代が変わると警告は色あせて、危険な地域にふたたび街が作られる。人間にとって40年というのは、記憶をとどめるには長すぎる時間なのかもしれない。

### ▼災害であらわになること

メーデーという番組では、過去の飛行機事故をとりあげ、その原因究明をドラマ仕立てで紹介する。ひとつの事故の背景には、さまざまな要素が重なっていることが多い。天候、金属疲労、整備不良、管制との連絡ミス、などなど。南米の飛行場に駐機していた飛行機が墜落した事故では、ピトー管という飛行速度を計測する機器が作動不良をおこし、パイロットがスピードを勘違いし、失速して墜落した。複数の機器がちがうスピードを示すためパイロットが混乱した様子が、ボイスレ

コーダーから読み取れる。結局、飛行機を屋外に長く駐機していたため、ピトー管に蜂が入り込み管をふさいだのではないかと推測されている。まさか、蜂一匹のせいで飛行機が墜落するとは。事故原因はたいてい自然現象と人的ミスが複合している。機体、整備、人的連携など主要な原因が明らかになると、すぐに警告を出して再発を防ぐ。私たちは失敗するけれど、失敗から学ぶことができる。その失敗では、日常ではわからない、システムの脆弱な部分があらわになるのだ。今回の岡山県倉敷真備地区の水害では、自宅1階で溺死した高齢者が多かった。垂直避難（2階や屋根に逃げる）さえ困難だったと思われる。集中豪雨、急激な河川増水だけでなく、高齢で一人暮らし、足腰が弱い、避難判断の遅れなど、被害には自然以外の人的要素も多い。メーデーではないけれど、災害の背景を多面的に考えることが必要だろう。寺田寅彦の「天災と国防」には、「天災は忘れたころにやってくる」という有名な警句がある。当時の関東大震災を経験した地球物理学者は、地球規模の変動と人間の時間感覚にずれがあることを見抜いていた。それでも、私たち人間は失敗から学びつづけるほかないのだ。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにくち しんいち)